

家出なんて絶対しない

さんま

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ひよんなことから異世界転移した中学2年の俺（柳田 ケイ）は、

ミステルテイン帝国の魔法技術省大臣の老人の養子となり、

帝国一の魔法使いを目指すのだが、、、。

異世界転移した場所はなんと重力が違い普段の力が何倍にもなる

という世界だった。

# 目次

	プロローグ	1
	序章	8
	転入編 第1話	17
21	転入編 第2話 無属性保持者	



## プロローグ

——「はぁー。はぁー。」

俺は、柳田 ケイ 絶賛家出中の中学2年生の14歳である。

家に帰りづらい、死ぬほど、さすがに言い過ぎたよなあ、、、。

◇◇◇◇◇ 2時間前 ◇◇◇◇◇

「ケイ、ちゃんと勉強してるの?」

母は、ノックせずに部屋に入ってきた。

そのとき、右手には、キノコ(多分わかるよね。) 左手には、スマホ。

つまり、オ○ニー中であつた。

見られたことのある人はたぶんわかるであろう、

ビミョーな空気が流れるのである。

簡単にいうと、家族みんなで夕食を食べているとき

テレビを点けたら、ドラマのキスシーンだった感じ。

思い出すだけでも、むずがゆい。

「ノックしてって言ったじゃん。」

静寂した空気を切り裂くように言葉を放った。

「あら、ごめんなさい。」

息子のオ○ニーでは、全く動じない母の横を通り過ぎて

「いつも、いつも、デリカシーのないことばかり。もうウザいんだよ。」

「こんな家になんか生まれるんじゃないよ！」

と、罵声を浴びせ。家をでた。

◇◇◇◇◇そして、今に至る。

でも、俺悪くないし、。

もとはといえば、ノックしないで部屋に入ってくる方が悪いよね。

だいたい、思春期の息子の部屋にノックしないで入ってくるということが、

どれだけ恐ろしいことだと分かっているのか？

逆に怖くないの？息子が自分の息子握ってたらどおすんだよ。

ちやんと考えろよお。

◇◇◇◇◇

「はあー」。

さつきから、ため息が絶えない。

こんな感じで街を暗い顔でトボトボと歩いていると、幼い頃よく遊んでいた公園を通った。

特にすることがなかったので、ブランコにすわることにした。

「昔は、よく両親と遊んだなあー。」

そんな回想の中、ふと視界に入った風変わりな老人を見つけた。

その老人は、俺の隣のブランコに座ってきた。

キセルに火をつけ、たばこを吸いながら、彼は話かけてきた。

「少年、浮かない顔をしているな。何かあったのか？」

キセル、いつの時代だよと思いつつ俺は答えた。

「思春期の性の問題。」

老人は悟り。笑い始めた。

「そうか。ハアツ、ハアツ、ハアツ。若き故の問題だな。」

「笑いごとじゃない、男にとっては、重大なもんだいだよ。もう家に帰りたくないよおー。」

「だつたら、家に来るか？」

「このときの、老人の顔は妙に真剣だった。」

「ああ、そうだね。家に帰るぐらいなら、どこにでも行きたい気分だ。」

——  
今でも後悔するこの言葉を  
——

俺は、急に意識を失った。

「ねえ、シないの?」

俺の隣で寝ている女がそういった。

「えっ、あんた誰?」

どこかであったことのあるような女性、しかも俺のタイプど真ん中。

「ねえてば、シないの?」

彼女は艶っぽい声で、俺の耳元にささやく。

「するって、何を?」

「女の口から言わせないですよ。意味わかるでしょ?」

彼女は、服をぬぎはじめた。残りが、下着だけになったとき、

「ホック外してくれない?」

「そうか。」

俺は、そういうと、彼女の胸に手を伸ばそうとした。

すると、目の前にある〃豊満な2つの山〃が、ふくらみはじめた。



やがて、自分の顔にかぶさり息ができなくなった。

「やばい、死んじゃう、、、。」

◇◇◇◇◇

—— 夢か——。

「わかつてたよ。途中からそんな気がしてたよ。いやでもさ、でもさあー。」

俺は、大きな声で嘆く。

「夢ぐらい、夢みせてよおおー。さつきは、オ○ニを邪魔され、しまいに、夢で  
で

お預けくらつてるよ。もおー——。」

叫んでいると、その声がこだまして、俺は異変に気付いた。

「どこどこだ？ さつきまで、公園にいたはずなのに？ それと体がめっちゃめっちゃ軽  
い。」

「起きたか少年。」

さつきまで、ブランコに乗っていた老人がしゃべった。

「ここは、ミステルテイン帝国のイカルガ峠だ。わしは君を魔法でこの世界に連れ  
てきた。」

弟子を君の世界の人間から探していたので、ちょうどよかったわけだよ。」

「つまり、俺は、異世界に来てしまったのかあ！」

「そういうことになる。」

俺は一瞬で顔が青ざめた、なぜならこの感じ、この状態たいい話はきまってる

「もしかして、もう帰れないのか？」

「ああ、そうだ。」

老人は、肯定した。

「嘘だろ。じゃあ、俺はどうしたらいいんだ？」

「君はわしの養子になってもらう。」

「一応わかった。それと老人名前は？」

「わしは、ガイル。ミステルティン帝国の魔法技術省大臣だ。少年、君の名は？」

「俺は、ケイ。14歳。それと異常なほど体が軽いんだけど。」

「ああ、それは、君のきた世界とこの世界では重力が違うんだよ。」

それを聞いた俺はおもいつきりジャンプをした、すると3メートルは越えているだろう跳躍をした。

はつきりいって、驚きをかかせなかった。

「よし、いつまでも外にいるわけにはいかない。家まで案内しよう。」

ガイルはそういって、峠を下り始めた。

## 序章

---

「ガイルと俺は、イカルガ峠を数分下ると、1つの都市が見えてきた。」

「ガイル、あの都市の名前は？」

「あれは、魔法都市リングルでミステルティン帝国の首都だ。」

「へえー。」

内心まあどうでもいい、と思いつつ俺は返事した。

◇◇◇◇

あれから、30分くらい歩き、やっとリングルの南門に着いた。

「身分証の提示をお願いします。」

2人の内の1人の帝国兵が言う。

「わかった、これでいいか？」

ガイルは、自分の懐から身分証を取り出した形状はパスポートに近い。

「ガイル・エインズワーク 帝国魔法技術省大臣、。あなたは、あの

ガイル様でありましたか。どうぞお通り下さい。」

やはり、ガイルは名のある魔法使いであることが、門番の態度からうかがえた。

街を進んでいくと、住居と露天商であふれんばかりであった。

よく暑い中、人混みにいられるなあと内心思っていた。

住居の建築様式は、中世ヨーロッパ風で基本レンガ造りという感じである。

商店街を抜け歩き出すと、遠くには、一つの城が見えた。

その城はミステルティン帝国の皇族が住み、かつ行政機関でもあるらしい。

またその隣には将来帝国を背負っていくだろう魔法使いを育てていくための

ミステルティン魔術学園がある。

てつきり、俺は城に行くのかと思っていたが、ガイルは城より東側の道を歩き始

めた。

道幅は狭く急こう配で歩きにくい。

「あと、もう少しだ。がんばって歩け。」

「これくらい、余裕だよ。」

普段なら、絶対きつく感じる坂を今では楽に登れる。

重力が軽いのが、影響しているのだろう。

今度は、少し大きめの住居が見えてきた。

「ふう、やっとついたか。＼転移＼の魔法を使ってもよかったが、

案内も同時に済ましたかったからのう。」

「やっぱり、魔法のある世界はなんでもありなんだな。」

「ん、何か言ったか？」

「やばい、驚きすぎて言葉にでちゃったてた。」

「まあ、とりあえず中に入れ。」

俺はガイルにそう促されて、扉を開けた。

◇◇◇◇◇

——— そこには、シャンデリアと赤いマット、主人の帰りを待つて  
並んでいる、メイド達。その中の1人が挨拶をした。

なにこれ豪邸じゃん、この家の子になるのは、まさに逆玉じゃん

きた、コレーーー。人生勝ったーーー!!

「お帰りなさい、ご主人様。」

「ああ、ただいま。」

「それ、その子は？」

「あちら側の世界から連れてきた少年だよ。挨拶してくれ。」

ガイルは、うかれていた俺の背中をポンと叩き、そう言った。

「俺は、柳田ケイ。14歳。よろしくお願ひします。」

げつへつへ、いい子だと思わせておけば、いいことあるかも、。

相変わらず俺もゲスよのう。一人脳内、妄想していた。

「ハイ、私はこのメイド長のスミスです。これからはあなたのことは養子として認め、坊ちゃんと呼べばよろしいでしょうか？」

「それでお願ひします。」

「それと、坊ちゃんの世話はこのメイド、セルフィーにあたります。何なりとお申し付け下さい。」

セルフィーはスカートの手端をつまみ会釈した。

互いの挨拶がおわるのを見計らってガイルは

「応接室とケイの部屋を用意してくれ。」と言って、

自分の部屋に戻っていった。

「それと、ケイ。夕食まで時間があるから。部屋でゆっくりと休むといい。

話はそれからだ。」

こうして、俺は、シルフィーに案内され自分の部屋のベッドに横たわった。

薄れゆく意識の中、見知らぬ天井を見つめながら、暗く深い眠りに落ちた。

——て下さい。起きて下さい。

ああ、女の人の声が聞こえる。これもまた夢かあ？

「坊ちゃん、お許してください。」

セルフイーはそういつて俺の肩を持つと思いつきりゆすった。

「え、なにセルフイー。」

深いまどろみから抜け出した俺は寝ぼけた表情である。

「ご主人様が、夕食を兼ねて話がしたいと、食堂で待っています。」

ついて来てください。」

積もる話があるのだろうと、セルフイーの表情から伝わってきた。

食堂は、廊下をまっすぐに進み、右に曲がればすぐだった。

廊下は全て、絵画やランプで装飾され、いかにも洋館らしい。

わあー。これマジで、お化けでそう。あつ、これフラグじゃないよ

食堂のドアを開けると、そこには長テーブルとイスとシャンデリア流石が豪邸。

「ケイ、早くここに座りなさい。一緒に夕食を食べようじゃないか？」

俺は手を招かれ椅子に腰かけた。

◇◇◇◇

席に座ると、横に一人、前に一人ずつ、女性がいた。

横にいる女性は、いまだ幼さを残した童顔で、

前にいる女性は、スラリとした足にくびれを持ち



胸部には豊満なものをもっている。簡潔に言えば、ぼん、きゅつ、ぼん。

「ケイ、みんなに自己紹介をしてくれ。」

「オーケー、俺は、柳田ケイ。14歳。ガイルにつれられてきた。」

そう自己紹介をしたあと、幼い方の女性？女の子は、

席を立ちまた自己紹介をはじめた。

「私は、セラ・エインズワーク。13歳です。」

ミステルティン魔術学園の中等科1年です。」

そして、俺の前にいる女性も同様に、

「私は、メリー・エインズワーク。16歳。」

ミステルティン魔術学園高等科1年です。」

自己紹介と食事を終えて、ガイルが口を開いた。

「これから、大事なことを話す、しっかりと聞いてくれ、ケイ、メリー、セラ。」

明日から、ケイには学園に編入してもらう。なぜなら、この家には男の跡取りがない。

つまりだ、ケイにこの家に恥じないような魔法使いになってもらいたいとおもっている。

そして今後は、メリーが長女、ケイは弟その妹としてセラとしてくれ。」

「ちよつと待ってくれ。」

魔法のことも世界のこともろくにわからない。なのに、編入なんてできない。

「ちゃんと説明してくれ。」

俺の言葉が食堂に響き渡る。

「そうか、ケイ何から話せばいい。それと二人ははずしてくれ。」

ガイルはメリーとセラに退出をねがった。

「わかった。この世界には五つの帝国とエミーニヤ聖王共和国でできている。

まず、五つの帝国はここミステルティンとノーランド、ブリージ、

ポルドリンク、ガンゲアの帝国だ。

エミーニヤ聖王共和国は、これらの帝国が協定を結び中立国となっている。

「ここまで、理解できたか？」

「なるほど。次に魔法について教えてくれ。」

「まず、魔法には攻撃魔法、防衛魔法、補助魔法がある。その中は、属性でわかる。

これは、木・火・土・金・水になる。

しかし、帝国でそれぞれ一つの属性しか学ぶことができない。

「ここミステルティン帝国は、火属性魔法しかつかえない。」

このように一つの帝国が一つの属性を持つことで、

互いに牽制することで平和を保てる。以上だ。それと君の属性を学園で調べることになる。たぶん火属性だ、。———ない限りなあ、。。」

最後にどもった言葉が気になったが、詮索はやめておこう。

「わかったよ。ガイルつまり、学園でしつかり勉強しろってことだよな?」

「それと、最後に養子をとった理由はもう一つある。実は、メリーは、心優しく人間として

素晴らしい女だ。だが、これと言つて魔術の才能がまるでない。目をかけてやってくれないか。」

「オーケー、分かった。それともう部屋に戻つていいか。少し疲れた。」

「ああ、ゆつくり休んでくれ、明日は学校だからな。」

こうして俺は食堂を出た。

◇◇◇◇

俺は部屋に戻つた。窓を開け、ベランダに出た。星がきれいだ。

「恥かかないような魔法使いつて、つまり、そこそこいい感じになれということだよなあー。」

でも、目指すなら帝国一の魔法使いだよな。よっし、決めた。俺は、帝国一の魔

法使いに

なる。そして、女の子とイチヤイチャしたいいい！  
そんな決意とともにベツトに潜り込んだ。

# 転入編 第1話

## 登校初日の朝

俺は、朝早く起こされ制服を着せられた。

形状は、セーラー服と学ランを合わせたような感じ。

その後、メリー姉さんとセラとともに朝食をとった。

メリー姉さんとセラは、昨日少ししゃべった感じだと、

とても接しやすい。

メリー姉さんは俺の体調を気にかけてくれた。

やはり優しい姉だなと思う。

俺は兄弟がいなかったから、姉と妹という存在は、

とても新鮮だ。

また妹は少し無口だが、13歳にしては、しっかりしていて

一応俺のことを兄さん呼ばわりしてくれている。嬉しいこと

この上ない。

いつの間にかに、俺シスコンになってんじやね。

冗談はここくらいにして、内心、マジ安心。

最悪、家族扱いしてくれないと思ってたから。

「さて、メリー姉さん、セラ一応編入の手続きがあるから、早めにでるね。」

「わかったわ、ケイ。行つてらっしゃい。」

「兄さんいつてらっしゃい。」

優しい家族に囲まれてよかった。

体も軽い、足に力を入れて地面を蹴った。

◇◇◇◇

ミステルティン帝国魔術学園の門をくぐると、

教員らしき男がいた。身長は、俺と同じくらいの170センチで、頭は薄らハゲどこにでもいる少し年取ったおっさんということだ。

「君が今日から編入するケイ・エインズワーク君ですよね？」

私は、これから君の担任なるんだ。よろしく。

それと、属性のチェックをしたいから、ついてきてください。」

先生はそういうと、東棟の中等部に向かった、突き当りを曲がり

魔法計測室に入ると。そこに置いてあった水晶玉に手を置くように促された。

俺は、水晶玉に手を置き数十秒待つと、水晶玉が黒くなった。

その瞬間、部屋に驚嘆の聲が響いた。

「ケイ君、君は無属性だよ。嘘だろ、君は10億分の1の確率で生まれたイレギュラーだよ。」

「その、先生。ええつと、属性は5つだけと聞いてんですけど無属性とは何ですか？」

「ガイル様から聞かなかったんですか？まず、無属性は

5つ全ての属性を習得し使うことができる。この帝国にも

一人しかいない。これは、外部に漏れると色々とマズイ。

このことは、内密に。それとあとで、ガイル様にも

報告しておきます。この学園にいるうちは、火属性を使つてください。」

「わかりました。」

「それと、そろそろホームルームがあるので、教室に向かいましょう。」

それから俺と先生は部屋を出た。

◇◇◇◇◇ 教室前

「出席終わり。今日は転入生を紹介する。ケイ君入ってきて。特有のざわざわ感が教室に漂う。」

俺は教室のドアを開けた。

見たところそれは教室というよりも大学の講堂といったところだ。

「こんにちは、俺はケイ・エインズワークです。魔法のことは

まだあまりわかりません。教えてくれるとありがたいです。」

すると、「やっぱり名前だけかよー。」

「姉に似るんじゃないか。」と聞こえた。

学園中に伝わるほど、魔法が苦手なのか。

やっとガイルがいつていたことがわかった。

俺はこの学園についていけるのか？という不安が

大きく押し寄せた。



# 転入編

## 第2話 無属性保持者

---

午前中の授業は、実技

内容は元素構成、つまり簡単に言うと

火の扱い方についてだ。

「みなさん、今回が初めての实技ですね。去年

一年間、座学で学んだことを意識して下さい。

まず、火を手に出すところから。」

周囲を見渡すと火を出せている人は

誰一人としていなかった。

やっぱ、難しいよな。

「コツは、全身にある魔力をまわりに放出し

それを次第に手の方向へ集中させる

するところやって、ほらね。」

先生はそういうと、手に火の塊を出した。

生徒も挑戦するがうまくできないという按配だった。

——手に集中させる感じかあ、。

俺は目を閉じ集中する、その中から体内にエネルギーっぽいものを感じる。ああ、これが魔力かあ。それを手に流し込むイメージ、。

今だ！

俺は、手に力を入れる。途端に、自分の手から火がでていているのを確認する。どうやら元素構成に成功したようだった。

見た感じ大やけどを起すような火だが全く持つて熱くない。すると、先生とクラスメートが集まってきた。

「おお、ケイ君。成功したようだね。今度は、形状変化をやってみなさい。」

形状変化はつまり手にある魔力の調整をすればいいのかな、俺は試しに刀を思い浮かべ、それに魔力をのせた、

その瞬間、火の塊から炎の刀として具現化した。

これには、先生も驚き感嘆の声を漏らした。

「形状変化なんて、一年間は修行しなくちゃいけないのに、。」

「これって、そんな難しいことなんですか？イメージの問題では？」

俺は余裕な表情で答えた。

「みんなそのイメージができないんだよ。やはり君は魔術の才能があるね。

さすが、エインズワーク家の息子さんだ。」

生徒のほとんどは拍手をしてくれたが、隅にはそれをよく思わない連中がいた。

—— 午後の授業も終わり、放課後になると、

席が隣の男？女？が話しかけてきた、非常に中性的で、優しそうな風貌だった。

「ケイ君、君すごいね。あんな簡単に形状変化した人

初めて見たよ。そうだ、僕は、カレン・シフォニア。

よろしく。」

「あの、。カレン君。その、俺まだ友達いないから、

友達になつてくれない？」

「うん、いいよ。それと、カレンでいいよ。

だから僕もケイって呼んでいい？」

「ああ、それでお願ひ。俺も堅いの好きじゃないんだよね。」

「同感。」

俺たちは、その言葉におおいにわらった。

「そうだ、カレンなんかクラスにき、。」

俺のことよく思っていない連中がいると思うんだけど

誰かわかる？」

すると、カレンは下を向いて答えた。

「ああ、あの人たちはキレノア家の関係者だよ。

エインズワーク家も魔術の名門でしょ。そのライバル

なわけ。だから、家のこともあるしあまり関わらない方がいい。」

「そうか、ライバルかあ、。厄介だね。」

「そうだね、それにお姉さんのこともあるからね。」

「カレンはメリー姉さんについてどこまで知っているの？」

「メリーさんは、名門な割には、魔術がからつきしダメ。」

その分、キレノア家の人にも馬鹿にされている。」

「姉さんが、馬鹿にされている？」

「そう馬鹿にされているというより、もうあれは

イジメに近いかも、しかもキレノア家も名門だから

止めたくても止められないというのが現状だよ。」

「そうか、それはひどいね。今度聞いてみよう。  
優しい姉さんなのに、。」

「そうだね。そうだつ、ケイ時間もいい頃だし  
一緒に帰ろう。」

「オーケー。」

こうして俺とカレンは一緒に帰った。